The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

他人によって清浄とならないとは
―― *Mahāviyūhasutta* を中心に ――

岸　本　正　治

はじめに

これまで『スッタニパータ』第4章，第5章の内容について発表しているが，今回は「清浄」をテーマとする．取り上げる経句は *Mahāviyūhasutta* で，そこに出てくる「清浄になるために必要なことは何なのか」を中心に論及していく．

また，研究するにあたり，いままでと同じように何点かの注意に気をつけることにした[1]．標題にある「他人によって清浄とならない」とはブッダがこの通りの言葉を発しているわけではない．908「…彼らは道をはずれて，他人によって清浄となると説く」というブッダの言葉から，ブッダが説く内容を要約したものである．

次の順序で述べていく．(1)『スッタニパータ』第4章，第5章で使われている「清浄」及び関連する語を抽出．(2)今回の中心となる経である *Mahāviyūhasutta* の構成とその内容の特徴点．(3)「願い求めることがない」の意味．(4)他人によって清浄にならない，とは．(5)むすびとして，ブッダの教説の中心にあること，またこれからの課題について．

『スッタニパータ』第4章，第5章で使われている「清浄」

「清浄」という言葉は，ブッダが説法をする中でオリジナル性の強い言葉ではない．すでにインドでは伝統的な「心身を清浄にする習慣」があったと見てよい．バラモンにおいては brahmacariyavā（梵行）という清浄行が行われていた．これは第5章1041にこの言葉が使われている．現在では心身を清めるガンジス河の沐浴が行われているが，ブッダの時代においてすでに行われていたのかも知れない．また，ヨーガについてはその起源が紀元前のインダス文明に遡るとも言われているが，『ヨーガ・スートラ』では浄化法が記されている[2]．ただこれらの文献が現在の姿になったのは，ずっと遅く，紀元後数百年経ってからだといわれて

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いる．ブッダの時代から1000年近い年数が経っており参考にはできない．

特に第4章ではブッダが説法を行っていた地域では「清浄」についての論争が行われており，ブッダも「論争」や「清浄」について言及をしている．

『スッタニパータ』第4章，第5章の中に「清浄（suddhi）」及び関連する語がどのような頻度で使われているのかを取り上げたのが下の表である．

suddhi（清浄）の反対語はa-suddhi（不浄）であるが，それ以外にもlippati（汚れる）という動詞が使われているのが散見できる．また関連用語として1041にbrahma-cariyavāが使われている．また複合語も散見される．

一見して分かることは第4章と第5章を比べると，圧倒的に第4章の方が多いことだ．これはブッダが説法の旅をする中で，清浄を主題とする議論が活発な所に行き会わせたことによったと推測できる．

［第4章］		839	suddhim		asuddhī
778	lippati	840	visuddhim	901	suddhim
779	upalitto		suddhiṃ	906	suddhī
788	saṃsuddhi	845	anūpalittaṃ	908	suddhiṃ×2
	suddhānupassī		anūpalitto	909	suddhiṃ
	suddha-anupassī	875	suddhiṃ	910	suddhināyo
789	suddhi	876	suddhiṃ		suddhiṃvado
790	suddhim	881	saṃsuddhapaññā		suddhiṃ-vado
794	accantasuddhī		saṃsuddha-paññā	913	lippati
	accanta-suddhī	891	suddhim	［第5章］	
811	lippati	892	suddhi	1041	brahmacariyavā
812	lippati		visuddhim	1079	suddhiṃ×3
	upalippati	893	asuddhidhammaṃ	1080	suddhiṃ×3
813	visuddhim		asuddhi-dhammaṃ	1081	suddhiṃ×3
824	suddhi	898	suddhiṃ×2		
	visuddhim	899	suddhiṃ		
830	suddhim	900	suddhī		

『スッタニパータ』第4章，第5章に出てくる「清浄」とその関連語
※コンパウンドについては下にハイフンで示した．

Mahāviyūhasutta の構成と内容

この経は20句よりなる．ただし内容についてはきれいに一貫しているとは言

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

い難く，後に集めた句を20になるように簡略化した可能性がある．このため，20句を区分けして，それぞれのテーマを見つけることはあまり意味がない．

構成上の問題点は別にして，内容的には*Aṭṭhakavagga*の他の経句と同様，論争が盛んに行われた環境にブッダが身を置いていたことがわかる．勿論，静かに坐禅瞑想もしていたと思われるが，説法を行うにあたっては，論争が盛んに行われている街や村などを回避することなどせず，「論争」のさまざまな問題点について，指摘していたようだ．

まず*Mahāviyūhasutta*から900～902と907～909とそれに関連する経句を他の部分より取り上げる．

願い求めることもなく（900～902）[3)]

900　すべての戒や掟を捨て，罪がある，あるいは罪がないという行為を捨て，「清浄（suddhi）であるとか，不浄（asuddhī）であるとか」といって願い求める（apatthayāno）ことなく，それらにとらわれず行うのがよい．寂静に執着せずに．

901　あるいは嫌な苦行に依り，あるいは見たこと（diṭṭham），聞かれたこと（sutaṃ），思われたこと（mutaṃ）に依り，様々な生存の内にあり，渇望を離れず清浄を声高く唱える．

902　願い求める者（patthayamānassa）には欲念（jappitāni）がある．また計らいの中では恐れおののくこともある．この世において死と生がないその人は何を恐れ，何を欲する（jappe）のだろうか．

この句は，獲得することをその生き様とする現代社会の中では，一般に理解しにくい内容であるだろう．900は次のように解釈できる．「清浄」「不浄」という二元的見方を避けるということ．さらに「清浄」を獲得すべき目標や目的としないということである．「願い求める」というのは極めて普通の日常生活においてあることである．ここでは内省，あるいは自分に問いかけるという自己探求を行うべきであるが，そうではなく，求め得るという方向に進むと解釈できる．

他人によって清浄とはならない（907～909）[4)]

清浄に関することで907，909も取り上げて検討すべき句である．

907　バラモンは他人に導かれることがない．また諸々の生き方（dhammesu）について断定をして，とらわれることもない．だから諸々の論争を超え

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ている．他の生き方（dhammam）を最も勝れたものだと見なすこともないからである．

908　「私は知る．私は見る．これはそのとおりである」という見解（diṭṭhiyā）によって清浄になるとある人々は理解している．たとえ見たとしても，それが自分にとって，何になるのだろうか．彼らは正しい道を外れて（atisitvā），他人（aññena）によって清浄になると説く．

909　見る人は名称と形態（nāmarūpaṃ）を見る．あるいは見てはそれらを認めるであろう．見たい人は多かれ少なかれ，それらを見たらよいだろう．達人たちはそれによって清浄になるとは説きはしない．

この句は900～902と関連する内容をもつ．908にある「他人によって清浄となる」というのは，他人の説に従うという意味であるが，これも「清浄」を獲得すべきもの，すなわち目的化されているからである．ではどの方向が適切なのであろうか．見えてくるのが，「自主独立」という道である．つまり，自分独りであっても可能であるということを示していると見ることができる．

むすび

この拙論は当たり前ではあるが，文字と論理によって表現している．共通言語を使う人間にとって，この文字とそれらの関係性を明らかにする論理は客観性をある程度保証するものであるのは間違いない．恐らくこのやり方はこれからも次世代，次々世代へと受け継がれていくであろう．

しかし，これはこのやり方でしか，現在見当たらないからこれに依存しているのであって，万能であるというのではない．なぜか，それは客観性がある程度保証されるから，研究の方向と内容が全く正しいものであると断言できないからである．

ブッダの語る「清浄」についてであるが，私たちが使う言葉（名称）とその意味について，論理あるいは思考の世界においては，「無」は「ない」ことであるが，無という文字が存在すれば，その意味も「有る」という概念世界を私たちは作り出している．概念世界の中だけで，矛盾を理屈によって回避することができるが，少し視野を広くとるなら，「無という意味がある」というのは矛盾そのものであることが分かる．

こういうことを鋭く指摘しているのが，今回の「清浄」についてのブッダの教説である．それはそのまま私たち研究者への問いかけでもあるのだ．私が清浄を

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

語るのなら，私自身が清浄へ向いていなければ意味はつかめない．研究者の治外法権などはないということである．

1）第59巻第2号，拙論『「両極端を自証して中間にも汚されない」という意味』の「はじめに」に記した内容は以下である．

1. 『スッタニパータ』第4章，第5章がすべての経典の中で一番古層に属するので，参考にされる文献は同時代か古いものを原則とする．
2. そうするとかなり参考文献は限定されるが，登場する用語が同じく第4章，第5章のほかの経にあれば，その用法と内容から研究対象の句の意味をある程度，囲い込むことができる．
3. 仮に，第4章，第5章以外のほかの経を参照する必要性が出てきた場合は，『スッタニパータ』第1章～第3章までとする．その時は第4章，第5章とは明らかに違う特徴点を，その都度明示するように心がける．

2）『ヨーガ・スートラ』の成立が紀元後のことなので，1.33の内容が『スッタニパータ』第4章，第5章の参考文献とは成り得ない．それではブッダが生存していた頃はバラモンあるいは一般大衆における「清浄」はどうであったのであろうか，改めて研究の必要があるだろう．『ヨーガ・スートラ』1.33ではśuddhi（清浄）ではなくprasāda（主に「清澄」と訳される）が用いられている．

1.33　maitrīkaruṇāmuditopekṣāṇāṃ sukhaduḥkhapuṇyāpuṇyaviṣayāṇāṃ bhāvanātaś cittaprasādanam//

1.33　［心の清澄を得る方法］慈，悲，喜，捨はそれぞれ他人の幸，不幸，善行，悪行を対象とする情操であるが，これらの情操を念想することから，心の清澄が生ずる．（佐保田鶴治『解説ヨーガ・スートラ』平河出版社，66ページ）

3）900　Sīlabbataṃ vāpi pahāya sabbaṃ　kammañ ca sāvajjanavajjam etaṃ
'suddhi, asuddhī ti apatthayāno　virato care santim anuggahāya.

901　Tapûpanissāya jigucchitaṃ vā　atha vā pi diṭṭhaṃ va sutaṃ mutaṃ vā
uddhaṃsarā suddhim anutthuṇanti　avītataṇhāse bhavābhavesu.

902　Patthayamānassa hi jappitāni　saṃvedhitaṃ câpi pakappitesu:
cutūpapāto idha yassa n' atthi,　sa kena vedheyya kuhiñ ca jappe.

4）907　Na brāhmaṇassa paraneyyam atthi　dhammesu niccheyya samuggahītaṃ,
tasmā vivādāni upātivatto,　na hi seṭṭhato passati dhammam aññaṃ.

908　'Jānāmi passāmi, tath' eva etaṃ'　diṭṭhiyā eke paccenti suddhiṃ:
addakkhi ce, kiṃ hi tumassa tena,　atisitvā aññena vadanti suddhiṃ.

909　Passaṃ naro dakkhiti nāmarūpaṃ,　disvāna vâññassati tāni-m-eva:
kāmaṃ bahuṃ passatu appakaṃ vā,　na hi tena suddhiṃ kusalā vadanti.

〈キーワード〉　清浄，願い求める

（国立県営兵庫障害者職業能力開発校非常勤講師）

NII-Electronic Library Service